

## 無口な女

高岡啓次郎

雑踏の中にその人がいて、薄い唇をきつく結んで通り過ぎた。周りの景色が消え、耳障りな喧騒が一瞬やんだように思われた。私は思わずふりむいていた。その人が進もうとしている横断歩道の方角に時空がずれる気流の音がして、私は目をしばたかせた。

「先生、どうかされたのですか？」

助手の青年が急に立ち止った私に話しかけた。空中を舞っていた銀杏の葉が青年の肩に落ちた。

「君は先に帰ってくれないか。ちょっと知っている人を見かけたものでね」

「分かりました。では事務所に荷物を運んでから帰宅させてもらいます」

「今日はごくろうさん。来週もまた頼むよ」

青年は長い手足をもてあますように頭を下げて帰っていったが、私は目標の一点からなるべく視線を離さずにいた。それは近くのホテルで行われた日展の第二次審査会の帰り道だった。私は書類の入ったカバンを抱えたまま助手と一緒に清洲橋を渡り終えようとしていたとき一人の老婦人とすれ違った。そのとき、あの人は帰ってきたのだという安堵に似た思いが口からもれた。私はいつの間にか通る必要のない横断歩道を歩き、ななめ横から老婦人を見ていた。

だが考えてみると、一昨年に還暦をむかえた私とその人とは、それほど年齢に大差はないはずだ。だが、七十にも八十にも見えるほど小さな全身には隠しようがない老醜が滲み出していた。その女の特徴は私の記憶に確かなものとして残っていた。度のきつい黒ぶちメガネからのぞく三白眼。前にせり出した小ぶりな耳。糸を引いたみたいな細い眉。それらは、かつて見たときと大差はないが、肌と体型には大きな変化が表れていた。顔も首も腕も、露出した部分の肌は着物のしぼりのように皺だらけで、背中は蝸牛みたいに曲がっていた。

もしかしたら人違いかもしれない。私は人波の中で歩く速度を弱め、記憶の棚からカードを取り出して照合していた。だがすぐに想いはひとつの結論を出していた。間違いない。あれはまぎれもなく見覚えのある人物だ。かつて私がモデルにした女であり、それまでのマンネリ化した作風を一変させるきっかけになった人なのだ。

女は買い物帰りなのだろうか。皮がやぶれかけたシミだらけの手押し車に野菜や飲み物を溢れるほど載せて横断歩道を渡ろうとしている。骨ばったお・お・き・やくの足運びが、いつ小石につまずいてもおかしくないほどおぼつかない。群衆は女を黙殺し、今にもぶつかりそうな勢いで左右を通り過ぎていく。女は都会を覆い尽くしたアスファルトのわずかな隙間に暮らす虫に見えた。

誰かに背中を押されるようにあとを追った。そうせざるを得ない不安定さを女は持っていた。案の定というべきか。女は車道から歩道に乗り上げるときの、わずかな段差で立ち往生してしまった。見ると手押し車がひっかかっていたが助ける者はいなかった。私は黙って進み出て手を貸していた。

「ご親切に、ありがとうございます」

女は三度も礼をくりかえした。ほんのささやかな行為に対して、水気のない声で、こちらが恥ずかしくなるほど大げさに礼を言い、地面にぶつかると頭にさわって去っていった。何もかもが巨大な都会の中で女は夕暮れの街並みのひとつの点にすぎなかった。そりたったビルの重みを独りで背負いこんでいる。そう言えるほど、その肩は小さく押しつぶされ、よろけながら黒い人頭の森にのみこまれていった。

私は着ていたアルマーニの少し大きめの背広の襟をただしながら女に向かってかすかに頭をたれた。舗道は深目地の石畳が続いていた。私はつまずかないように地面を見ながら歩いた。視線に入ったダンヒルの皮靴が敷石の上で光っている。女をモデルにしていたころの服はひどく汚れ、使い古した靴はみすぼらしく破れていたのだが。

なぜ自分が無意識のうちに見知らぬ老婦人に頭を下げてしまったのか。それは、あの女との何気ない邂逅が私の運命を変えたからなのだ。それは何かの恩を受けたとか、落ちぶれているときに金を恵んでもらったというのではなく、何らかの艶めいた関係があったわけでもない。

その出会いの当初は誰にでもある普通のものだった。道端ですれ違う通行人と何ら変わるものではない。だが、その人物のもつある一点に関心を持ったために、結果として私を変えたのはまぎれもない事実であり、言い様によっては、運命のなせる気まぐれかもしれないのだった。私は川に沿った夕暮れの街を歩きながら二十年以上も前の出会いを思い出していた。画家としての自分の才能にいきづまり、独りで悶々と暮らしていたアパートはまだあるだろうか。

隅田川を南下し、佐賀稻荷神社を目ざした。辺りはすっかり変わっている。私が暮らし

ていた古い集合住宅は神社の裏手にあつたはずだ。しかし、確かにここだという場所に立ってはみたものの、そんな建物があつたという痕跡すら存在しなかった。そこには明るい色調のタイルを貼った真新しいマンションが、周囲のインテリジェントなビル群に負けまいと虚勢をはるように建っていた。

来た道をもどると、私の視線は河畔に注がれた。岸边にブルーシートで囲った小屋が点在し、ホームレスたちがたむろしているのが目に映った。自分と彼らとの間にある隔たりとは何だろう。一般人と流浪の民の差とは何だろう。それは紙一重に違いなく、今は画壇で先生ともてはやされている自分も、あのままいけば同じ道をたどっていたかもしれないのだ。

あれは私がまだ四十に達する少し前だった。ゆがんだ窓を開ければ町の喧騒が一気に耳をさし、隅田川の方から蒸し暑い風がながれてきた。日当たりの悪いアパートの一室で、カビ臭さと絵の具の匂いにまみれて暮らしていた私は、そのころ昼夜を分かつた歯痛に悩まされていた。不規則な暮らしと、ろくな栄養も摂らなかつたせいもあるだろうが、歯はぼろぼろだった。歯茎は黒ずみ、前歯はぐらつき、奥歯は疼いていた。

画家としての自分の才能に賭けてみたい。そんな思いで、千葉にある商業系の大学を中退した私だったが、一向に芽が出ないまま十五年が過ぎていた。夜はイタリアレストランでの皿洗い。日中は近所の子どもたちや何人かの主婦に絵を教えていた。食費と部屋代を払ってしまえば余裕といえるものはなく、治療にかけるお金も捻出できないまま、眠られない夜を我慢しながら過ごしていた。ペンチを取り出して全部ぬいてしまいたいと思ったほどだ。

そんなおり、私が絵描きとしての修業中であることを知ったレストランのオーナーから肖像画の依頼を受けた。それは職場の慰労会の席で誰かが冗談半分で私を褒めたので、オーナーが機嫌のよさにまかせてほろ酔い気分で頼んだものだった。私は二週間で一〇号の油絵を完成させたわけだが、オーナーはそれを見て大げさなほどの賛辞を表した。

それだけで十分に嬉しかったが、オーナーは将来あんたが有名になるのが楽しみだよと言つて予想外の金額を渡して私を驚かせた。思いがけない金を手にしたとき、真っ先に向かったのが川向うにある歯科医だった。我慢ならない奥歯はもちろん、他にも直すところはたくさんありそうだ。貧しい生活の影響は最もよく歯に現れるというが、私の場合もまさにそうだった。

「先生、いつそのこと、悪い歯はみんなひと思いに抜いてもらえませんか？」

まだ三十代かと思われる若い医師は、うーんと唸りながら首をひねった。

「いや、あなたもまだお若いのだから、なるべく残したほうがいいでしょう。それに、こんなに腫れているときは抜くことも削ることもできないのですよ」

医師はそう言って、歯を消毒し、毎日飲むようにと抗生物質を出してくれた。まずは化膿をとめ、腫れがひくのを待つというわけだ。レントゲン写真を見ながら、緊急に治療を必要とする歯が五か所に及ぶという説明を受けた。数日間、消毒のためにだけ通い、十日ほどでやつと奥歯の痛みから解放された。それから週に一度の本格的な治療が始まり、やつと落ちていて周りを見渡す余裕ができてきた。

そこは商業ビルの七階に位置し、広い窓から隅田川にかかる永代橋と周辺の街並みを一望できた。防音ガラスの向こうの世界と自分がいる場所が同じとは思えない錯覚におちいつてしまうことがある。大学生の風貌が抜けきらない医師は動きがきびきびしていて手際がよく、歯科助手たちはほっそりとした美人ぞろいで誰もが親切だった。

それに引き替え——。そういう前置きが必要なほど異質な人物がひとりいた。それは受付に座っていた女で、視線以外は能面のように固まっており、恐ろしいほどに無口だった。こちらが挨拶しても反応がなく、今日は暑いですねと親しげに話しかけようものなら、眉をキリツと動かして睨みつけるような眼差しをとばす。私は思わず身がすくんでしまうほどだった。

機嫌の悪いときに話しかけてしまったのだろうと思い、しばらく時が経ってからもういちど話しかけてみた。きのう絵を教えに行っている家の近くでアパートの階段をおりてくる彼女が見えたから、かつこうの話題になるに違いないと思った。もしかしたら笑顔のひとつも見られるかもしれない。

「きのう人形町を歩いていたら、あなたが階段を下りてくるのを見ました。あの辺に住んでいるのですね」

なんの他意もなく声をかけてしまったのだが、女は余計なことを聞くなと言わんばかりに三白眼をすばやく左に逸らせた。私は大きな契約をとりそこなったセールスマンみたいに力なく場を離れた。長年の孤独な生活で人と関わることに自信をなくしていた私はまたしても打ち砕かれたという心境だった。

でも不思議と腹は立たなかった。何かしら自分と共通点を持っている気がしたからかもしれない。私は彼女に興味をいだいた。何かの健康上の理由で話すことに問題のある人なのだろうか。そういう観点からしばらく観察したこともある。だが、そうではなさそうだ

った。治療費の計算は実に手際よく、算出された金額をすばやく請求するのだ。女は腹話術師がするところの、唇をほとんど動かさないうで話す技術を会得していた。歳のころは四十を少し過ぎたくらいだろうか。私と同じか少し上くらいに思えた。

真ん中から分けた髪は漆黒で、耳の下に不ぞろいに垂れている。唇は小さめで形はいいが、キツと結んだ感じには意志の強さが滲み出ており、早くこの仕事をかたづけられて煩わしい人間世界から遠ざかりたいという固い決意めいたものがあつた。小柄で細いならかな肩をもち、服装は歯科助手が着るアイボリーホワイトのワンピースに青いエプロンをさげている。全体として見るに、それほど容姿の劣る女ではない。弓なりに伸びた眉や形のいい額のあたりに知性を隠し持っているようにも見える。

時がたつにつれ、あまりにも近づきたいこの女への興味は募るばかりだった。それは奇妙なことだが、画家のはしくれとして、ときおり降りてくる天啓というものかもしれない。その人物は神が造つた特異な作品に思えた。

それまで私は、もっぱら美人画ばかりを好んで描いていた。洋の東西を問わず、古今の美人画家の模写をし、ひととおりの技術をつかんだつもりだった。だが、私の制作した画はどの展覧会に出しても入選はするものの、決定的な評価をもらったことがなかった。自分の才能を崇めてさえいたはずなのに、その信仰は年を追うごとにゆらいでいった。

私の精神状態は水の枯渇した砂地となっていた。いつ筆を折ってもおかしくない心理状態のとき私はこの女に会つた。美人画というジャンルから離れて、この蠟人形に似た女モデルにして絵を描いてみようと思いつたのだ。

私の日々の生活は誰もが予想するまでもなく困窮の極みだった。千葉の田舎にいる両親からは、大学を辞めていらい勘当同然の扱いを受けていた。その年の春に父親が亡くなり、久しぶりに故郷に帰つたが、役所づとめの弟はあからさまに私に対する軽蔑を表した。絵の指導や皿洗いでは足りない金を近所の廃品を回収してまかなっていたのが、ホームレスのすることだとまで言うのだった。

当然ながら、私は弟の職業蔑視の考えに猛反発し、おまえが軽視している仕事こそ社会を本当に支えているはずなのだ、という論議を多くの实例を並べて解き明かそうとしたが、それが弟の心の琴線にふれることはなかった。私はそのとき、親せきが一樣に示した危惧を冷笑し、彼らの視線を黙殺した。母親は早く普通の生活をして家庭を持ってほしいと涙ながらに言ったが、さすがに母親にだけは虚勢をはる勇気はわかなかった。

そのころの私は半同棲していた女友だちと別れたあとで、薄着で吹きさらしの風に身を

さらしている生活をおくっていた。美大出の彼女はけっして美人ではなかったが、情の深い人だった。画家として大成する夢を共有し、若さにともないがちな肉体の渇きを癒しあっていたが、一向に芽がでない貧乏暮らしに疲れたのか、別の有望な絵描きと親密になつて私のもとを去ってしまった。

絵描き仲間の何人かは早々に画壇で認められ、それなりの地位をしめている。教師におさまつて安定した生活を営みながら絵を描いている仲間も何人かいる。彼らに負けてなるものか――。そんな闘争心も日を経るごとにあせていき、風になびく貧乏くさい鯉のぼりみたいな諦念に変わつていった。このままでは自分はだめになる。画家としてだけでなく人間として生きることさえ、ままならなくなつてしまう。あらゆるものから疎外され、最終的には自分自身からも疎外されて生きるすべをなくしてしまう。

そんな恐怖の延長線上にいたとき私は無口な女と出会つたのだ。これが自分にとって最後のモチーフかもしれない。私は夢中で部屋の壁に架けていた作品をはぎとつていた。新しいものを描くのだ。そんな突き上げる衝動を感じたのは数年ぶりだった。

それからというもの、私は歯科の待合室で女を観察し、死相に似た影をただよわせている表情を克明に写し取ろうとした。警戒心を起こさせずにペンを動かす。女が患者を見るときの微かな光の変化をとらえようとした。傍に人がいないとき、ときおり神経質に眉をピクつかせる癖があることもつかんだ。そんなとき女はメガネを直すふりをして眉間に指をあてて軽く揉んでいた。もしかしたら、顔面に何らかの神経の異常があるのかもしれないと私は思った。

夢中でスケッチブックの上でペンを動かした。素早い速度で移動させる線には、しばらくなかった力がみなぎつていた。右手に握られた鉛筆の飛跡には女の肌を舐めるような動きがあり、画面から女のかすれた声が返ってくるような手ごたえを感じた。そのデッサンの中には現実の女には感じられない性的な妖艶ささえ滲み出していた。明らかに私はモデルを見ながら自分だけの女を造りだしていたのだった。

家に帰ると、私は今まで描いた美人画のキャンバスから盛り上がった絵の具をナイフで削り、かたっぱしから塗りつぶした。そうして新たに生まれた白い画面に思い浮かぶ線を何本かひいてみた。デッサン帳をときおり見るにしても、できるだけ自分の脳裏に宿った女の心象を絞り出そうと試みた。五枚ほどのキャンバスは少しずつおもむきが異なつた像が形を現しはじめた。画面の女は確かに本人に似てはきたが、そのフォルムのどれもが、これだ、と唸るような決定的な何か欠けていた。

首やこめかみに浮かびあがった青い血管を描きこんでいたとき私は考えた。この細い迷路の中に、いかなる血が流れているのだろうか。山陰の深い泉に似た人を寄せつけない眼差しは何を見ているのか。そんな疑問が筆をぴたりと止めた。女をもっと知らねばならない。モデルの内面を写し取るためには、私生活を可能な範囲で覗き見る必要がある。私は翌日から歯科医のあるビルのそばに身を潜め、仕事がひけるのを待って女のあとをつけた。女は人形町の古い三階建てアパートに住んでいた。それは、いつか通りかかったときに見かけた建物だった。そこはアパートといっても、昔は何らかの由緒ある場所だったのかと思わせるおもむきが残っていた。傾きかけてはいるが、切妻の屋根には滑らかな曲線があり、かつては立派な瓦が貼られていたのではないかと思わせる優美さがあつたし、黒ずんだ軒下にも腕のいい大工が手がけたにちがいない複雑な彫り物が残っていた。

女が辺りを見回すような視線を飛ばしたので私は知らぬふりをして建物の前を通り過ぎた。少しして戻って見たが、果たしてどこの部屋に向かったのかを知ることではできなかった。その日の私は妙な臆病心を起こし、何か覗いてはいけないものを見ているような気がしてそのまま家路についた。

私の好奇心は容易に収まらず、数日後に再びその場所を訪れた。かつては華麗だったであろう古い木造建築についても知りたくなかった。陽が沈むまで時間がある。まだ女は帰ってこない。道路を隔てて斜め向かいに薄汚れたトタン屋根の雑貨屋があつた。その古さからして何かを知っている気がしたので、道路にせり出した品物の間を通って店の中に入った。薄暗い壁紙は飴色に変色しシミだらけだった。そんな古壁と同様のくすんだ色の服を着た五十代と思われる店の主人に近づいた。怪しまれないようにスケッチブックを目立たせ、それを前面に持って聞いてみた。

「お向かいの古い建物はおもむきがあつて絵になりますね。ずっと前からアパートなのでしょうか」

「お宅は絵を描きに来たのかい」と主人は言った。私がうなずくと立ち上がり、作り笑いと言えなくもない口もとをゆがめる微笑を浮かべて話した。

「ここは昔、ある政治家の邸宅だったんですよ。それが人手にわたり、戦前は春を売ることを兼ねた料亭としてにぎわったみたいですよ。私が生まれる前の話ですがね」

私はうなずいた。その建物が醸し出す陰影には、かつて淫靡な行為が繰り広げられてきたような後ろ暗い雰囲気は確かにある気がした。

「おふくろの話では、赤線が廃止されてから幽霊屋敷のようになっていたものが改築され、

鉄骨の外階段が取り付けられて共同住宅になったのだという話です」

幽霊屋敷と言ったときの男の痩せ窪んだ眼の光が気味悪く感じられるほど、目の前にそびえる建造物は都会に取り残された過去の遺物に見えてきた。私は礼を言っただけで店を出ると、あらためて女の住む建物を見上げた。後日取り付けられたという鉄階段も、今は悲惨なほど赤錆をさらしている。一部が張り替えられた横張りの外壁も何度か防腐塗装を繰り返してきたのだろうが、老朽化は隠しようがない。昭和初期のままと思われる張り出した格子窓には、所どころ硝子が割れた部分にだらしなくガムテープが貼られていた。

だが、保存状態が比較的ましな出窓の一角には、むかし女たちが濃い化粧顔で客に艶声をかけていたと思わせる雰囲気が残っており、窓囲いに絡まった蔦の葉の茂りには、かつての肉欲の饗宴を覆い隠すような碧い影があった。

そのとき夕日が沈む方向に、仕事を終えた歯科医の女が路地の角からこちらに向かってくるのが見えた。黒っぽい長そでのブラウスに、細めのサックスをはいて目深に帽子をかぶっている。いつか見たときとまったく変わらない服装だ。時刻は夕方六時をまわっており、仕事を終えてまっすぐ帰宅したにちがいがなかった。

女は乾いた金属音を響かせて鉄階段を上がり三階の共同入口の引き戸を開けた。視界から女が消えてまもなく、暗い窓の一角に明かりが灯った。あそこが住まいなのかと思っただけで、すぐあとに出窓が開けられた。手すりから洗濯ものを取り込もうとする姿は、まさしくあの女だった。その動きは素早く、空中の蠅でも叩き落とすような勢いで衣類は姿を消し窓は閉められカーテンがひかれた。秋の夜気が冷たいせいもあるだろうが、少しでも早く外の世界から自分を遮断させようとしているのか。

それから、私は何度も女のアパートを見にいったが、その私生活を感じさせるものとは、ときおり窓越しに干されていた数枚の洗濯物しかなかった。そこには女の他に同居人がいる雰囲気は感じられなかった。外から女の部屋を眺めていたら一匹のチワワが管理人と書かれたドアから飛び出てきて私にまわりついた。痩せすぎて可愛げのない犬に思えた。少し遅れて出てきた老人は犬と同じような表情をしていた。小柄で頬がこけ、黒目だけが異様に光った男だった。私は一瞬ハツとして唾をのんだ。数日前に訪ねた雑貨屋とそっくりと言っているいい陰気な雰囲気を負っていたからだ。

老人は建物を凝視していた私の存在に気づき、あなたは何度も来ているようだが誰かを捜しているのかと詰問する口調で言った。その視線には犯罪者を警戒するいぶかしさが滲み出ている。私は返答をあいまいなままですませた。そのときから私は具体的な情報が得



られないまま女の家に行くのを諦めた。

だが、こうして費やされた時間はどうかやら無駄にならなかったようだ。ひと月にわたる取材じみた行為をとおして、私はあるものを感じ取ったのだ。それは女の私生活を何ら詳らかにしなかったとはいえ、女が持つ深遠ともいえる孤独や隣人への不信をありありと感じ取った。それに女の住まいをとりまく陰気な影も気になった。偶然かもしれないが、雑貨屋といいアパートの管理人といい、まわりついてきた子犬さえ、なぜか似たような暗さをもっている。それは私自身にも通じるもので、都会の片隅に存在する、陽の当たらない掃き溜めのような空間が厳然と存在するのを感じ取った。

私が女を描くにあたって心がけたのは徹底的なリアリズムだった。しかもそのリアリズムは女の外と内とを映しとるのはもちろん、私の網膜に映る私だけの女でなければならなかった。女はあらゆるものから疎外されている雰囲気があった。仕事を持って社会に生きてはいるが、それ以外はあきらかに外界から意識的に自分を遮断させている。しかも女は誰も知らない理由ゆえに、自らをそうした状況に埋没させているのではないか。その存在が醸し出す限らない孤独は、本人しか知らない真実の姿からさえ自分を疎外させている気がした。それをキャンバスに具現しなければならぬ気がした。

何度かの取材をとおして、絵の背景となるものはしっかり映しとることに成功した。陽の当たらない裏窓。小便臭く不衛生な袋小路と卑猥な落書き。錆びて今にも落下しそうな鉄階段。けだるい靴音をたてて上がる女の足。勝手に他人のベランダで居眠りするノラ猫。集合アンテナにとまるカラスの群と、まき散らかされた糞がこびりついたアスファルト。

私はこれらを一枚の絵に抽象化して画面に叩きこむ決意だった。いつしか私は女の中に自分自身を見ていた。都会で暮らす挫折した画家の内奥に隠された砂漠のような孤立感をキャンバスに描こうとしていた。こうして『無口な女』の五枚の連作は描きあがった。私は五本の歯を治療するために約一年間歯科医に通った。その間、女の応対は判で押したように全く変わることがなかったが、私が治療を終えるすこし前だったろうか、いつもと違う女を一度だけ見たことがあった。

それは縁なしメガネをかけた学者風の紳士が患者として窓口に現れたときだった。その日はスケッチブックを持っていかなかったので漠然と女を見ていたわけだが、応対ぶりに何らかの動揺を感じさせる激しい狼狽が観察されたのだ。言葉はつかかり、名前を二度も訊きかえし、冬眠しているようにすわった目が、急に落ち着きなく動いていた。それがなぜなのか私には理解できなかった。

治療期間に描きあがった『無口な女』は今までの自分の作風を一変させるきっかけを与えた。それは幾つもの名のある展覧会で絶賛されることとなった。それからの私は一躍画壇で注目されるようになり、以前は評価されなかった美人画も連動するかたちで人気を博すにいたった。それがわずか一年たらずのうちに起きたことを考えれば、まさに私にとっては人生の大転換を意味していた。

人形町に住まう女が、夫殺しの逃亡犯として職場で捕まったのはそれからまもなくだった。匿名の通報が最寄りの警察署にあつたというが、逮捕現場が女の働く歯科医だったところをみると、患者の誰かが知らせたのかもしれないと私は思った。

女が長年精神を病んでいた学者の夫を京都の自宅で薬殺したのは十四年も前だという。当初は計画的な故殺だと思われていた事件だったが、その後の調査で、何度も自殺を試みた夫が、自ら死にきれずに妻の手を借りた可能性がある」と報道された。女の足取りは伏見にある産婦人科で墮胎手術を受けたあとプツツリと途絶えていたということだ。女は夫を殺害したあと、身ごもっていた子どもを育てることに絶望したのだという。

私は当然ながらニュースに驚愕したが、どこかで得心する部分もあつた。女を取りまいていた何もかもが、暗い過去と一緒に引きずっている雰囲気があつたからだ。私は数紙の新聞を手に入れて食い入るように文字をひろつた。そのとき関西系の新聞に載っていた写真に目が止まった。それは殺害された女の夫を写したものだ。死亡時の年齢は四十九歳だと記されている。フレームのないメガネをかけた白髪まじりの品の良い顔立ちで、京都の名門大学の教授らしく、さも学者らしい知的な風貌だった。

それを見たとき、私の中でひとつの場面がよみがえつた。普段まったく表情を変えない女が、ある日とつぜん違う面立ちを見せたことがあつたあの時だ。もしかしたら、女は自分が殺した夫とそっくりな姿をした患者の前で激しい衝撃を受けたのではなかったか。無論それは私の推測にすぎない。一枚の写真だけで決めつけることはできないだろう。

私の絵がマスコミにとりあげられたことと、女の逮捕は何か関連性があつたのだろうか。いつとき、そう考えたこともあつたが、それが記事にされたことも、警察から事情を聞かれたこともないところをみると、おそらく無関係なのだろう。だが私はなぜか、自分が女を白日にさらしたような気がしてならなかった。闇に埋もれていたものを掘り起し、拡散した光の下に無理やり連れだしたのかもしれないのだ。

それには一つだけ、もしやと思わせる理由がある。私の描いた『無口な女』は顔も姿も大きくデフォルメされており、おおよそ本人とは似ても似つかわしくないものだ。ところ

が、私が絵に描きこんだ、ある作為の一つが、今おもえば自分の心に、後悔にも似た納まりの悪い不快感をもたらしていた。

その作為とは他でもない。それは女の首にあった痣なのだ。それはけっして目立つほど大きなものではなかった。何かで消したような楓の葉に似た跡が残っているだけなのだが、それを私はことさら誇張し、画面的な効果を狙って、とりわけ大きく描きこんだのだった。おりしも、女が捕まった報道に袖なしの服を着て、長い首を鎖骨まで露わにした昔の写真が掲載されたが、首の付け根にある痣は、まさに私が作品に表現したのとまったく同じと、いつてもいいくらいだった。

だが、そのことが、とりたてて話題に出るわけではなく、画評に取り上げられることもなかった。画面の背景に描かれた雑多な物体や抽象化された図形によって見る者の注意は分散されたようだ。しかし、私の絵が注目を浴びたのと時を同じくして女が世間に身をさらしたことが私には偶然とは思えず、人間界を背後から見ている何者かが戯作で書いた筋書きのようにも思われた。

いずれにしても、二十年前に会った無口な女は私の運命をも変えていたのだった。当の本人はそんなことを知る由もないだろう。だが、それはまぎれもない事実なのだ。しかし私は知っていた。真に自分の運命を変えたのは他でもない。それは私の網膜に映った女であり、私のなかで造りだし、自分と融合してできあがった孤独な魂そのものだったのだと。

自転車の急ブレーキの音が私を瞑想から覚醒させた。学生風の若者は私を睨んで新聞を積んだまま街角を走り抜けていった。再び都会の喧騒がたちまち私をとりまいた。夜風が襟元から入りこんで私を震えさせた。ビルの背後に横たわる隅田川は都会の夕暮れを吸い込んで複雑な光を点滅させながら流れている。ゆれる水面の影は一瞬にして移動し光と融合する。人も物も、あらゆるものが変容しながらうごめく大都会で、残るものは結局これしかないような気がした。

一瞬にして飛び去って戻らない雑多な音の洪水に私は呑みこまれそうになった。そんな中で、私は再びかすかな声を聴いた。人間が造り上げた巨大な建造物の谷間に消えた女が、頭を地面につけるようにして繰り返し口からほとばしらせた礼の言葉だけが哀しく耳に残った。そのとき私は無性に女のあとを追いたくなくなって河畔の道を駆けだしていた。都会の片隅に埋もれた人を、私は失っていた家族でも探すような切なさを感じながら石畳を夢中で走りぬけた。

了

## 受賞の言葉

北に住む者は南に憧れます。二年前から海という同人誌に入れていただいたのも、そうした想いの表れであったと思います。まだ代表の方以外には会ったこともなく、いつか北九州の文学賞をとって皆さんとお会いできたらと思ってきました。このたび、北九州文学協会の栄えある賞をいただいたことを心から感謝しております。文学協会やスタッフの方々、評価して下さった審査員の皆様に心からお礼を申し上げます。

『無口な女』は五年ほど前に私が実際に通っていた歯科医院にモデルになる女性がいたおかげでできあがりました。一年も通っているのに挨拶もなく、こちらが明るく話しかけても笑顔ひとつ見せずに無視されました。当初は不快な気持ちになったものですが、ある日から、これほど無口な女性は何かの影を背負っているに違いないと考え、そこで次々とイマジネーションがわいてきたのです。いわば私の妄想によってできあがった小説なわけです。

このように日常生活で普通と違う人に会ったとき、それが腹立たしいものであれ小説のきっかけになるのだとつくづく思いました。それからは変わった人にあつたときはいめたと思うようにしています。私は若い頃に詩を少し書いていましたが、学生時代から五十四歳まで一貫して絵を描いていました。その年から小説を書くことに目覚め、それらい十一年間、一枚も絵は描いていません。ただ、過去に夢中でスケッチしたことは文章を書くことに大変役立っています。景色や人物を見つめ、ときに内面まで見ようとする行為は小説を作り上げることと共通しているからです。

九州はとても文学的にレベルの高い所と聞いています。ここで賞をいただいたことを励みとして、これからも人間の不可思議さを書いていきたいと思えます。今テーマとして追っているのは現代病のひとつである『自分が分からなくなる』ということですが、それに関連して人間に宿る魔性の不可解さも追求していきたいです。